奈可切遺跡発掘調査報告

１９９６・３

三重県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財は、 祖先が残した貴重な文化遺産であり、現代に生きる私たちの責務として、これを積極的に保護し、後世に伝えて行くとともに、更なる文化の向上のための礎とすべきものであります。しかし、一方では地域経済の活性化、あるいは住民の生活や安全の向上のために、各種の公共事業も必要と考えられます。そこでどうしても現状保存の困難な部分については、発掘調査を実施し、記録の保存を図ってきているところであります。

ここに紹介致します飯南町の奈可切遺跡の発掘調査結果も、一般地方道片野飯高線の拡幅工事に伴ってやむなく実施されたものです。飯南町での本格的な発掘調査は今年度初めて行われましたが、この発掘調査の成果が消滅した遺跡に代わり、郷土の歴史ひいては文化を伝え、活用されていくことを切に望みます。

なお、文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県土木部並びに松阪土木事務所、飯南町教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心より感謝致します。

平成８年３月

三重県埋蔵文化財センター

所 長　　川 村 政 敬

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が三重県土木部から執行委任を受けて実施した、一般地方道片野飯高線［道新］緊急地方道路整備（A改良）工事に伴う、飯南郡飯南町本郷字奈可切に所在する奈可切遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査は、下記の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
主事　西　出　　孝
主事　宇　河　雅　之

3．発掘調査後の出土遺物の整理は、調査担当者の他、管理指導課が行った。

4．本書の執筆・編集は、西出が担当した。

5．挿図の方位は、すべて真北を用いた。なお、当地域の磁針方位は、西偏6°30′（昭和61年）である。

6．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7．本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑

8．調査にあたっては、県土木部道路建設課、松阪土木事務所、飯南町教育委員会、並びに地元の方々のご協力を得た。また、現地作業に際しては、以下の方々にご尽力いただいた。記して感謝の意を表したい。
北垣内つるへ・磯田順子・松本郁代・井上利二・大久保善平・小阪光夫・杉坂喬・青木幸子
磯田タチ・河村正子・嶋田春美・下部とよ・杉浦なを・鳥本たみゑ・森田敏・上林勝・中西和美・中西ゆき子・中村とき江・中村はるへ・松倉とみ代・森本一夫（敬称略）

9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ．前言……1
Ⅱ．位置と歴史的環境……1
Ⅲ．遺構……3
Ⅳ．遺物……9
Ⅴ．結語……10

挿図目次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　遺跡地形図……3
第３図　調査区位置図……3
第４図　調査区遺構平面図……4
第５図　Ａ地区・Ｂ地区土層断面図……5
第６図　ＳＢ１～３実測図……6
第７図　ＳＫ42・ＳＫ43・ＳＫ９・ＳＫ40・ＳＫ37実測図……7
第８図　出土遺物実測図……11

表目次

第１表　出土遺物観察表……12

図版目次

図版１　調査前風景（東から）……13
　　調査区遠景（東から）……13
図版２　Ａ地区全景（西から）……14
　　Ｂ地区全景（西から）……14
　　Ｃ地区全景（西から）……14
　　Ｂ地区下層全景（東から）……14
図版３　ＳＢ１～３（東から）……15
　　ＳＫ９・40（北東から）……15
　　Ａ地区土坑群（東から）……15
　　ＳＫ42(北東から)……15
　　ＳＫ43(西から)……15
図版４　出土遺物（１）……16
図版５　出土遺物（２）……17

Ⅰ．前　　言

（１）調査の契機

一般地方道片野飯高線は、多気郡勢和村片野から櫛田川の南岸沿いに飯南町を経て飯高町に至る幹線道路として、付近の住民に利用されている県道である。一部道幅が狭く、対向に難渋する区間が存在しており、通行緩和と地域振興のためにも、よりスムーズな交通路の整備が必要とされていた。平成３年度に県土木部道路建設課から事業計画の回答があったが、事業地内に周知の遺跡の存在は知られていなかった。しかし、付近には多くの縄文時代の遺跡の存在が認められており、平成４年度の分布調査の結果では土師器・山茶椀などの散布が確認された。また、平成６・７年度に２度にわたり行なった試掘調査では、中世の遺構・遺物が検出された。道路の整備工事は、すでに調査地に隣接する地点まで及んできており、調査地の所在する現道部の拡幅工事も回避することは困難な状況と判断され、発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

（２）調査の経過

発掘調査は、平成７年11月１日から開始した。調査は、県道の南側の水田部分をＡ地区、県道の北側の茶畑部分をＢ地区とし、この両地区の調査は12月５日に完了した。Ａ地区の西側部分で検出した掘立柱建物が北へ続くため、Ａ地区とＢ地区の間の現道下も工事の際、追加調査することになった。この部分はＣ地区とし、平成８年２月26日から28日までの３日間行なった。合計の調査面積は、890㎡であった。

なお、当遺跡の名称は、分布調査時の段階では、中切遺跡とされたが、のちに飯南町内の同音の他の小字名であることが判明したため、当遺跡の所在する小字名から奈可切遺跡として報告することとする。

Ⅱ．位置と歴史的環境

奈可切遺跡（1）は、三重県飯南郡飯南町本郷字奈可切に所在する。飯南町は、高見山系に源を発する櫛田川の中流域に位置し、この川の段丘に沿った平坦地と急峻な傾斜地から成り立っている。櫛田川は粥見付近で大きく曲流するが、その蛇行の始まる地点の右岸に奈可切遺跡はあり、標高は約116mである。現況は集落に隣接する水田と茶畑となっている。

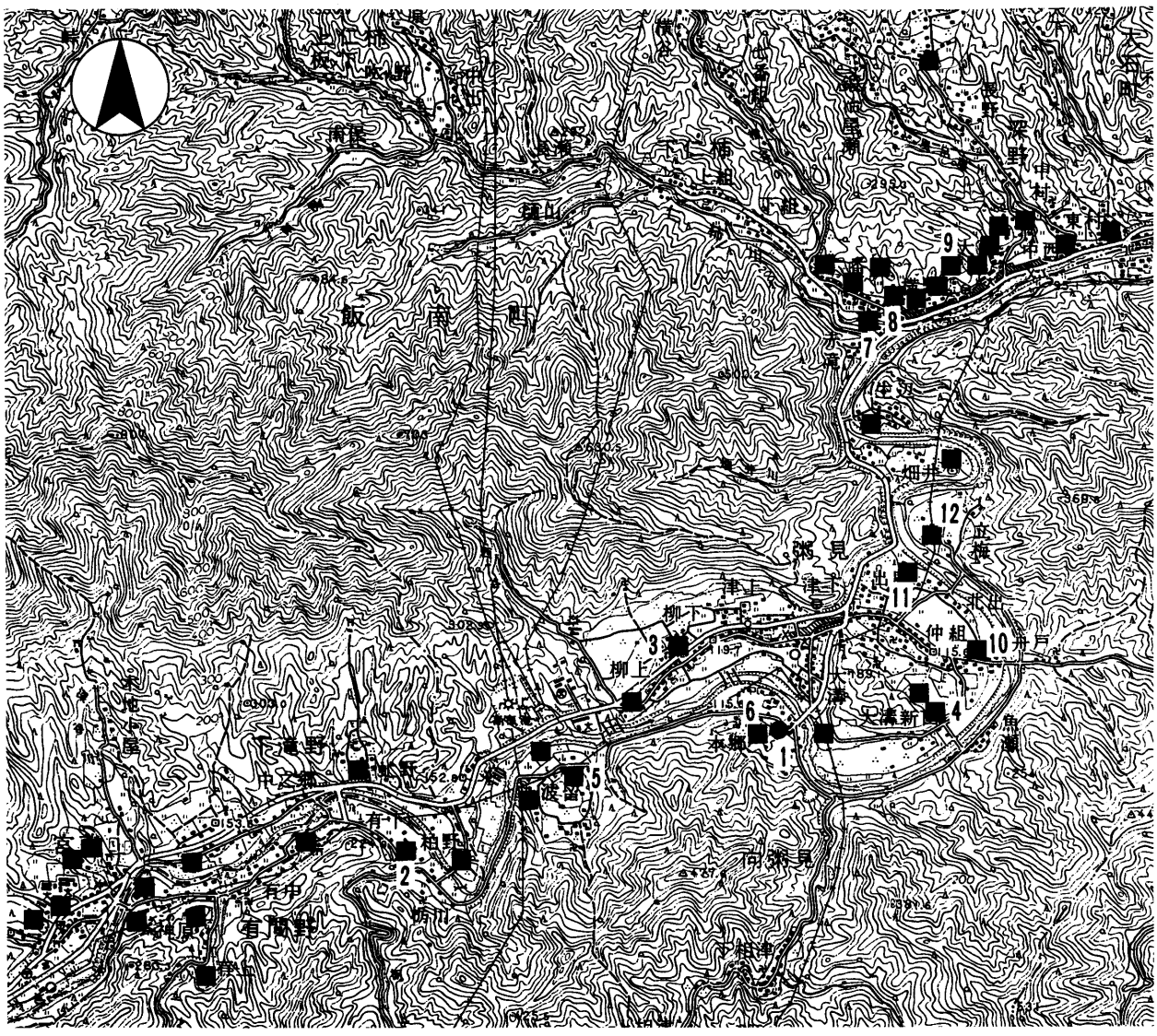
櫛田川の上・中流の河岸段丘には、旧石器時代から縄文時代の遺跡が点在している。奈可切遺跡の周辺においても、尖頭器が出土している下中切遺跡（２）（有間野）や堂之庭遺跡（３）（粥見）、大鼻式や大川式の押型文土器が採集された足ヶ瀬遺跡（４）（粥見）などが、旧石器時代の末から縄文時代早期の遺跡として知られている。また、縄文時代中期の遺跡としては、奈可切の上流に波留遺跡（５）（波留）があり、石鏃や石匙等が見つかっている。奈可切遺跡の西側の北向きに延びる小高い尾根にも遺跡が存在する。中山遺跡（６）と言われるこの遺跡からは縄文時代後期と考えられる石鏃・掻器・石錘・土器等が出土している。その他、縄文時代各期を通じて土器片・石器が見つかっている百合遺跡（７）（下仁柿）では、県内では数少ない黄島式や茅山下層式類似のものも確認されている。

このように、この付近は早くから人々の生活の場であったことは確かな地であるのだが、縄文時代以降の遺跡については、ほとんど知られていない。弥生時代のものとしては、上ノ垣外遺跡（８）（横野）や殿垣内遺跡（９）（横野）があるが、発見されている遺物は極めて少ない。[1] また、古墳も現在のところ見つかっていない。

古代の飯高郡に属する地域に影響力を持っていたと考えられる有力者としては、『続日本紀』天平14年(742)4月条に「伊勢国飯高郡采女正八位下飯高君笠目之県造等、皆賜飯高君姓」と記されている飯高氏の名が上げられる。飯高氏は丹生の水銀を支配し、それを都に送ることにより栄えた。しかし、律令制度の崩壊とともに、10世紀頃にはその勢力も衰えを見せ始めたと言われる。

その後、代わって台頭してくるのが伊勢神宮の勢力である。『太神宮諸雑事記』永承4年(1049)6月条によると「又同郡粥見御薗司時季殺害犯人丹生住山人紀重常同常晴　為直等也」とあり、飯高郡の粥見御薗（現飯南町）で御薗の司が殺される、という事件が起こったことが記されている。[2] これにより、11世紀半ば頃には伊勢神宮領が成立していたことが推定される。さらに時代が下ると、 飯高郡では、他にも苦木御薗（現飯南町）・寒河御薗（現飯南町）・滝野御厨（現飯高町）などの神宮領が存在したことも明らかになっており、 これらは南北朝期まで存続する。[3] この頃の遺跡としては、12世紀前半頃と考えられる瓦器片が出土している百合遺跡、土師器・山茶椀が出土している溝端遺跡（10）（粥見）、川ノ上遺跡（11)(粥見)、土師器片が多数散布している立梅遺跡(12)（粥見）などが挙げられる。

しかし、その神宮領も鎌倉幕府滅亡後、建武の新政を経て、南北朝抗争の世になると新たな時代を迎えることになる。康永元年（1342)、南朝の中心人物である北畠親房の三男、顕能は、それまで拠点としていた玉城町の田丸城を北朝方に落とされると本拠を美杉村多気に移す。以後、その子孫が織田氏に滅ぼされるまで約230年間、飯高郡は北畠氏披官層の支配の下に置かれるのである。伊勢本街道（現368号線）と川俣街道（和歌山街道の古称、現166号線)という伊勢と大和を結ぶ二つの古道が合流するこの地は、伊勢神宮の影響を受けながら古代の大和へはもちろん、中世は、殷賑をきわめた多気城下へも通じる地として、重要な位置にあったと言える。

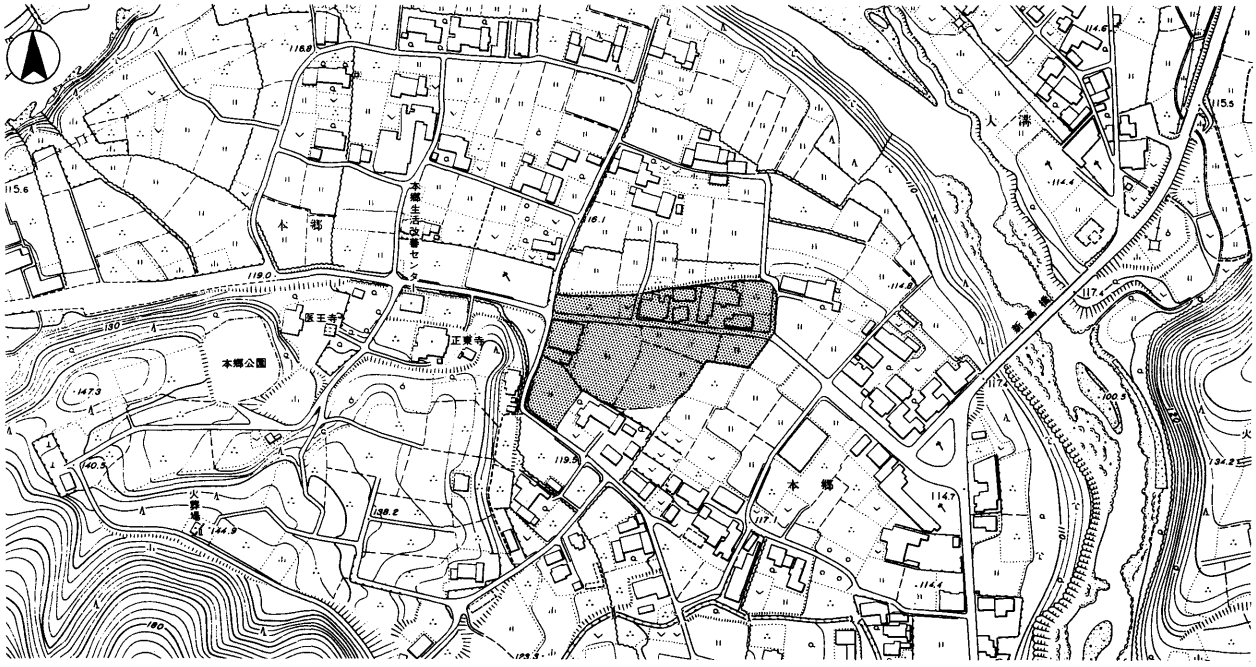


第1図　遺跡位置図（1：50,000）［国土地理院　松阪　1：50,000］

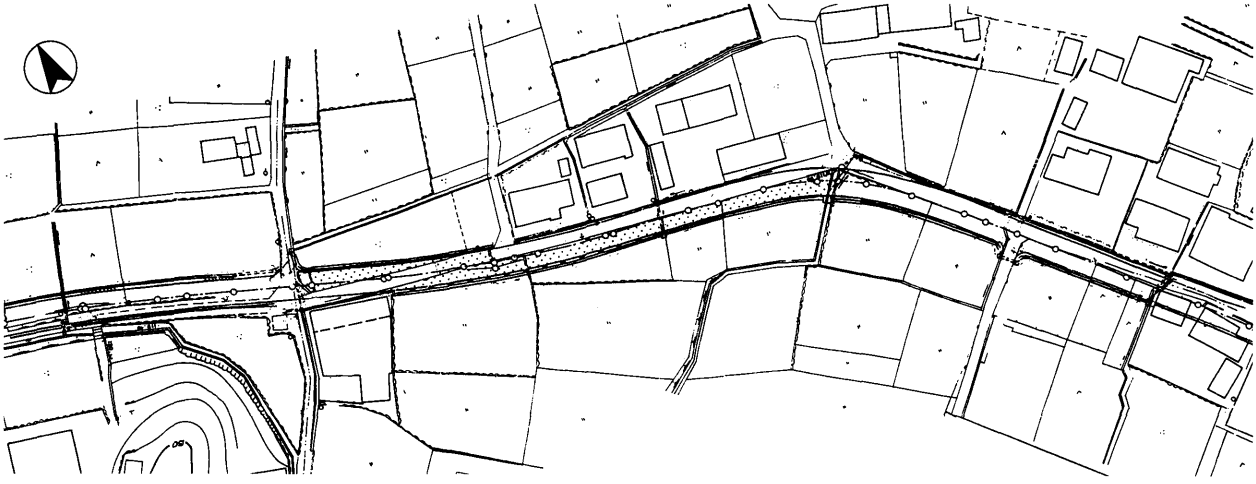
Ⅲ. 遺　　構

（1）基本的層序

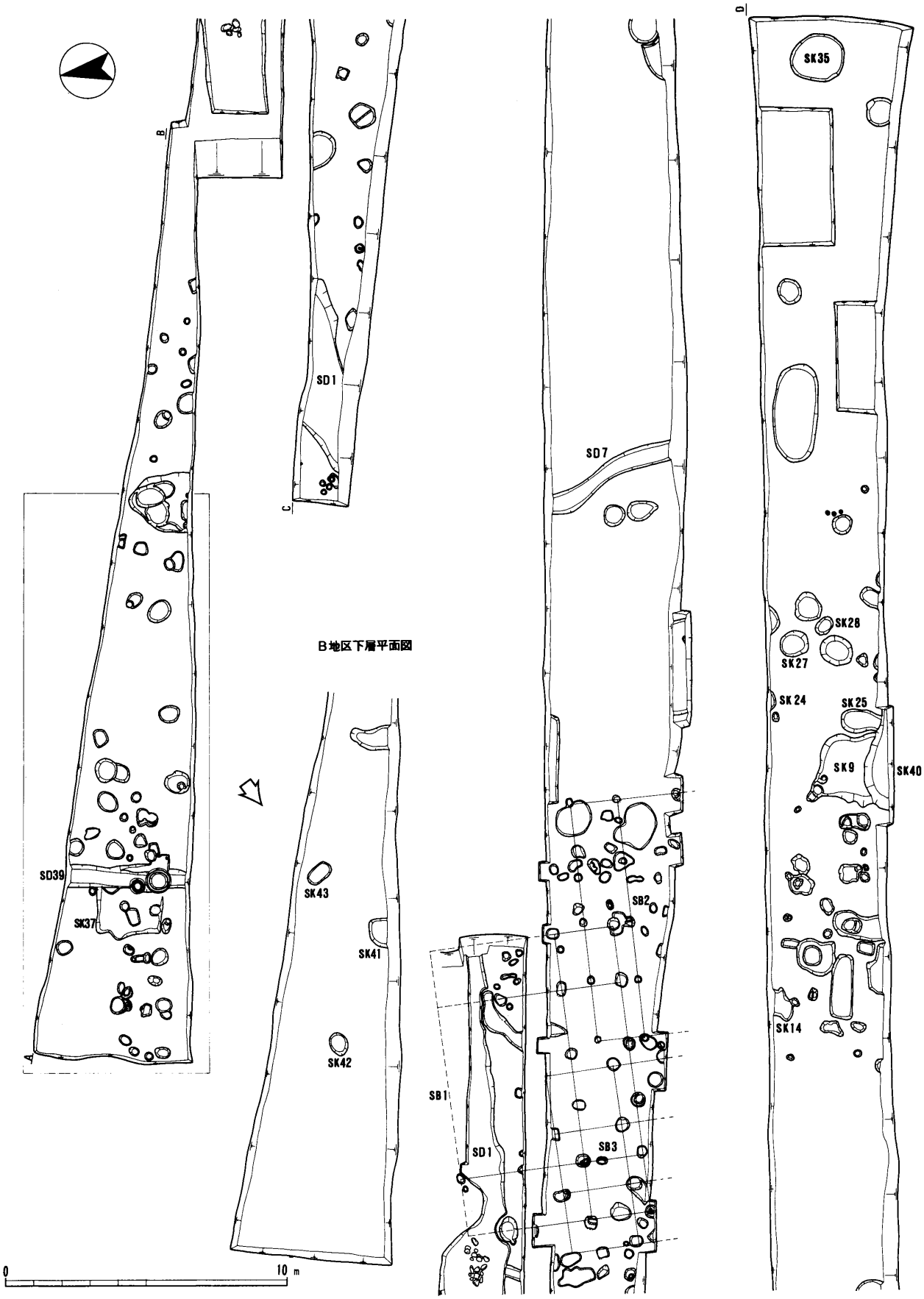
基本的層序は、第1層の耕作土、第2層の数cmの床土を含む遺物包含層である暗茶褐色土、第3層の暗茶褐色土混じりの弱粘質の黄褐色土である。中世の遺構は、基本的には第3層の黄褐色土層上面で検出した。遺物は、第2層の暗茶褐色土と遺構から出土した。なお、A・B地区においては、第2層と遺構から縄文土器片が出土したので、B地区全体と、現道を挟んで隣接するA地区の西側部分の一部において下層の確認を行った。B地区では、第4層は暗灰褐色砂質土、第5層は淡黄灰褐色砂質土で、それ以下は、淡黄褐灰色の砂となった。遺構の検出は、第4層の暗灰褐色砂質土上面で行った。流れ込みと思われる少量の縄文土器片が、中世の遺構検出面である第3層の黄褐色土と土坑から出土した。A地区においては、第3層より下は所々で灰黒褐色、灰茶褐色、明茶褐色などの砂質土に変わり、一部で砂礫や攪乱を含みながらも、基本的には砂層となった。遺構や遺物は確認できなかった。



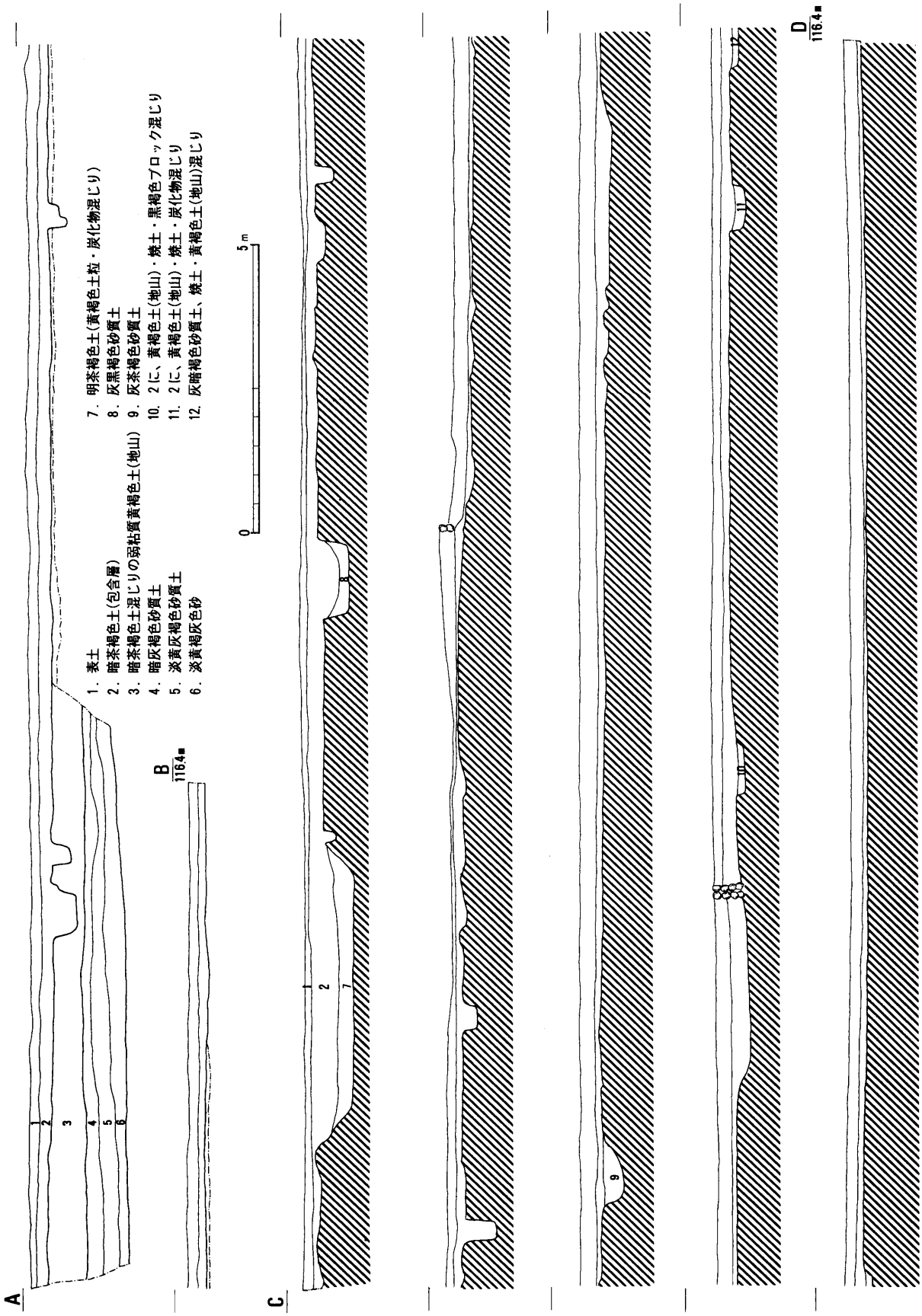
第2図　遺跡地形図（1：5,000）



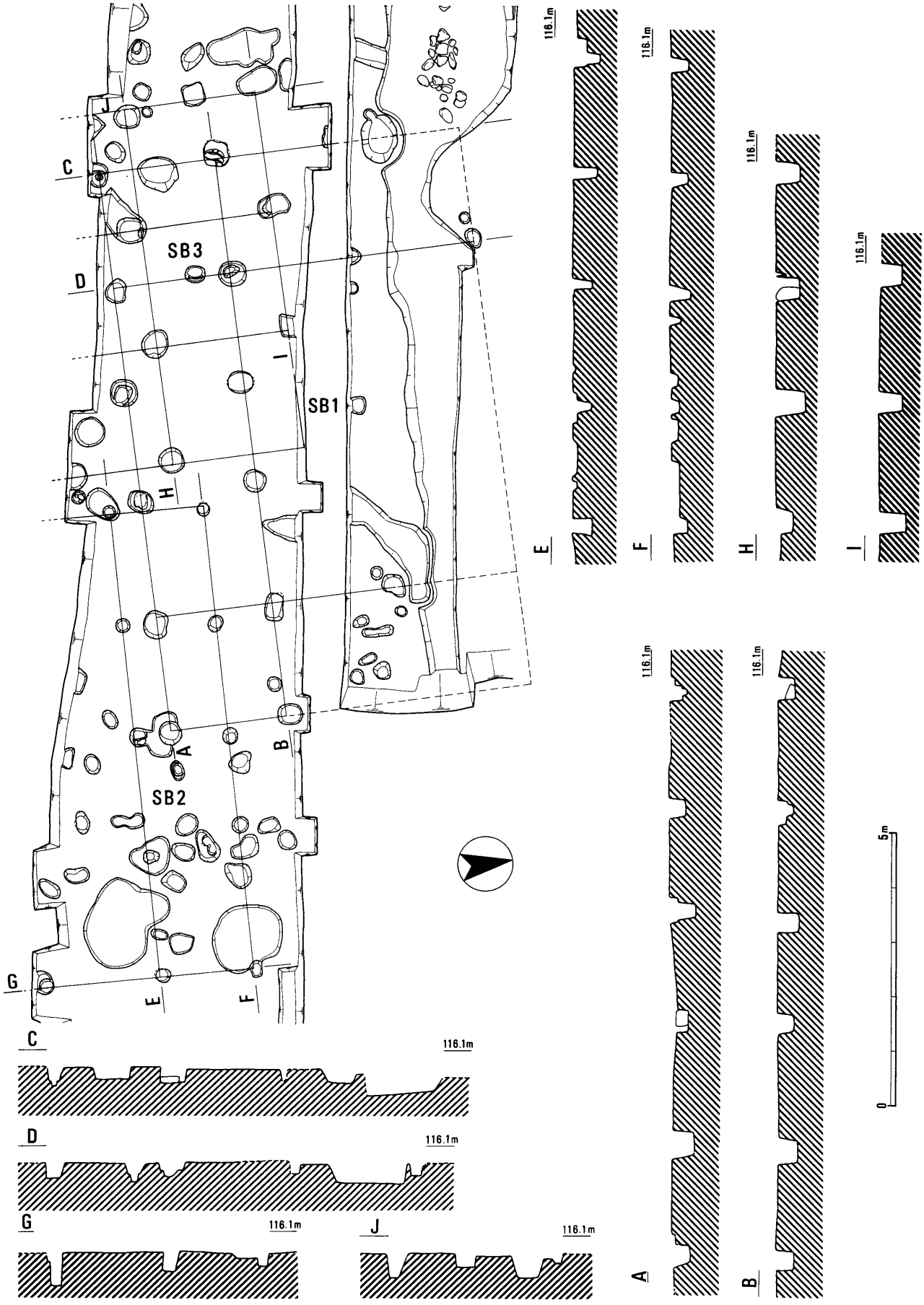
第3図　調査区位置図（1：2,000）



第４図　調査区遺構平面図（1：200）



第5図　A地区・B地区土層断面図（1：100）



第6図　ＳＢ１～３実測図（1：100）

（２）検出した遺構

今回の調査において検出したのは、縄文時代の陥穴状の土坑４基と、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物３棟・溝５条・土坑など、中世の集落遺構である。以下に時代順に述べていく。

①縄文時代の遺構

Ａ　土坑

ＳＫ41　Ｂ地区の下層の中央部の南端から調査区外へ広がる。遺存部分は東西１ｍ×南北0.6ｍで半円の形状を呈する。深さは0.6ｍで、土坑壁は、ほぼ垂直である。埋土は、黄褐色土であり、縄文中期末から後期初めの土器が出土した。

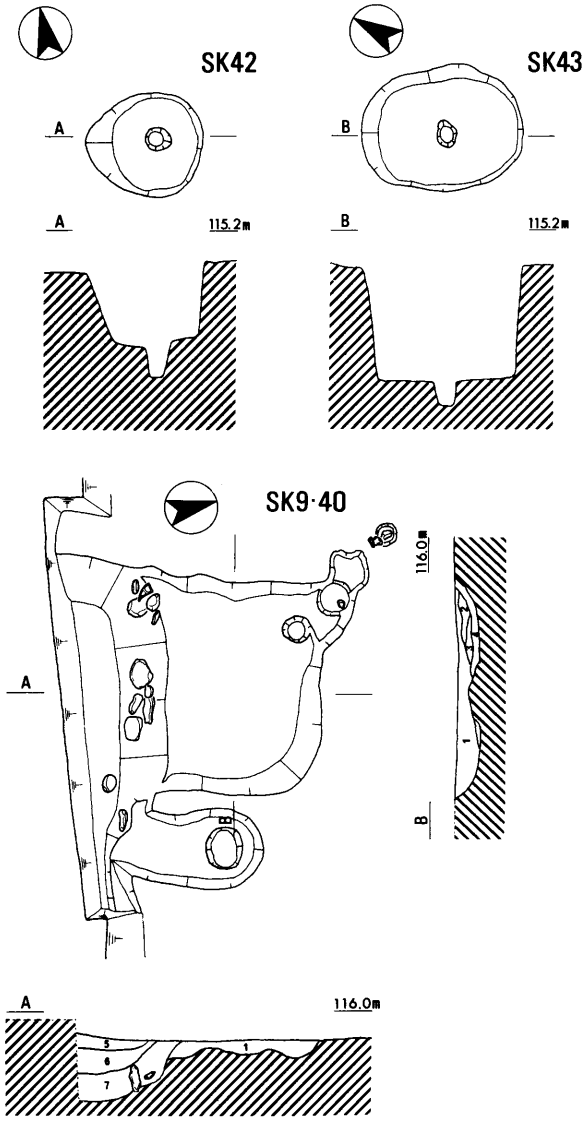
ＳＫ42　Ｂ地区の下層の西側中央部に位置する東西1.25ｍ×南北1.1ｍ、深さ0.8ｍの円形の土坑である。土坑壁はほぼ垂直で、底部中央に直径0.25ｍ、深さ0.4ｍの窪みが見られ、浅いという点で疑問は残るが陥穴と考えられる。遺物は見られなかったが、埋土は第３層の黄褐色土で、ＳＫ41とほぼ同じ時期のものと考えられる。

ＳＫ43　Ｂ地区の下層の中央部の北端に位置し、東西1.3ｍ×南北1.7ｍ、深さ1.2ｍの楕円形の土坑である。ＳＫ42と同様に、土坑壁は垂直で底部中央に直径0.25ｍ、深さ0.3ｍの小穴の窪みが見られるところから陥穴と考える。遺物は見られなかったが、埋土は第３層の黄褐色土で、ＳＫ41・42と同じ時期のものと考える。

②鎌倉時代から室町時代の遺構

Ａ　掘立柱建物

Ａ地区の西側部分から北のＢ・Ｃ地区にかけて多



第７図　ＳＫ42・ＳＫ43・ＳＫ９・ＳＫ40・ＳＫ37実測図（１：80）

くの小穴を検出した。全体の規模は、いずれも不明であるが、A・C地区にまたがって3棟の掘立柱建物を確認した。B地区では、遺構としてのまとまりは認められなかった。

SB1 A地区からC地区にまたがる東西棟の大型の建物である。東・西・南の3面に廂を持つと考えられる。身舎は、桁行3間（6.1m）×梁行2間（4.4m）以上である。北面については、調査区外のため不明である。柱間はおよそ7尺（2.1m）の等間で、柱穴は直径0.4m～0.6m、深さは0.3mほどのものが多く、深いものは0.5m以上あった。棟方向は、E4°Nである。柱の基礎となる川原石(根石)が置かれているものも見られた。出土した土師器小皿や山茶椀から時期は13世紀初めの建物と思われる。

SB2 SB1と同様に東西棟で、棟方向は、E4°Nである。身舎の桁行4間（8.5m）×梁行1間（2.1m）以上で、北側に廂を持つ建物と考える。柱間は身舎で7尺（2.1m）の等間、廂は桁行7尺（2.1m）、梁行6尺（1.8m)である。調査区の南へ延びると考えられ、柱間の不揃いな総柱建物の可能性も残る。柱穴は直径が0.3mと小振りで、深さは0.3m～0.4m、深いものは0.6m近いものもあった。柱穴より出土した土師器小皿から、時期は14世紀と考える。

SB3 SB1・2と同様に東西棟とするならば、方向はE5°Nである。桁行3間（6.3m）×梁行1間（2.4m）以上の建物と考えられ、柱間は桁行が7尺（2.1m)、梁行が8尺（2.4m）である。総柱建物の可能性があるが、調査区外の南に延びると思われるため、北面に廂を持つ建物と考えることもできる。柱穴は直径0.4m～0.5mほどで、深さも約0.4m～0.5mであった。柱穴より出土した土師器鍋から、時期は、SB1とほぼ同時期と思われる。

B　土坑群

A地区の東側部分では、形や大きさ、深さが多種多様な土坑が集中して見られた。性格はよくわからないが、黒褐色土の埋土に細かな炭化物や焼土が含まれている点で共通性が認められ、一連の土坑群として把握する。

SK9 A地区東側の土坑群のほぼ中央に位置する、隅丸の方形と思われる土坑である。規模は東西は約2.3mである。南北方向は、SK40に切られてよくわからないが、遺存部分は約1.6mである。深さは、0.2mほどと浅いが、13世紀半ばと思われる山茶椀や土師器皿・小皿・鍋が出土した。

SK40 SK9を切って南の調査区外の水田部へ延びる。形状についてはよくわからない。東西の長さは約3.8m、深さは約0.6m。周囲には人頭大の石が置かれていた。焼土と炭化物の混じった黒褐色土層から、土師器や山茶椀とともに宋銭（「景徳元宝」1004年初鋳）や刀子などが出土した。SK9と大きな時期差はないと考える。

SK37 この土坑はB地区の西側のほぼ中央部に位置する。ほぼ正方形の形状を持つ。東辺をSD39に切られているが、東西約2.5m×南北約2.3mである。深さは0.05mほどで浅い。土師器鍋などから15世紀前半のものと考える。流れ込みと思われる縄文土器が出土した。

C　溝

今回、5条の溝を検出したが、いずれも細長い調査区を横切るように流れており、詳細は不明だが、掘立柱建物に関連するものである可能性は高い。

SD1 A地区の西端を南西から北東方向にむけて横切り、現道下を東に曲がりながらC地区に出、そのまま東の方向へ下って行く溝である。幅は2.5m前後で、深さは0.3～0.5mである。断面形状は、逆台形を呈する。埋土は、A地区においては暗茶褐色土であったが、C地区においては少し変わり、灰色がかった暗茶褐色土であった。遺物は、土師器小皿や皿、山皿、青磁小皿などが出土した。遺物と掘立柱建物との関係から、掘立柱建物SB1よりやや時期が下り、14世紀前半のものと思われる。

SD7 A地区のほぼ中央を南北に調査区外へ流れる。幅は0.6m～0.7mと狭く、深さは、0.2mほどであった。断面形状は皿状で、埋土は、灰茶褐色砂質土であった。遺物はほとんど出土せず、時期はよくわからないが、その方向から掘立柱建物に関連する区画溝的なものであった可能性が考えられる。

SD39 B地区のSK37を南北方向に切っている溝である。幅は南端で0.55m、北端で0.8m、深さは、約0.3mである。断面形状は逆台形状で、埋土は暗茶褐色土である。土師器鍋などから15世紀前半のものと思われるが、12世紀の皿や鍋も混じる。SD7と同様に掘立柱建物に関連する区画溝的な性格を持つものであったと考えられる。

Ⅳ. 遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、 整理箱にして18箱であった。これらの遺物は、縄文時代と、平安時代末～室町時代中期の２つの時期に大別できる。

以下に特徴的な遺物について概略を述べる。縄文土器については時代順に、中世の土器については遺構別に記してある。個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

（１）縄文・弥生時代の遺物

Ａ地区・Ｂ地区の包含層である第２層の暗茶褐色土、Ｂ地区の中世の遺構検出面にあたる第３層の黄褐色土と土坑から出土した。いずれも深鉢と思われる土器の口縁部と体部片である。

①早期後葉～前期の遺物　１～３は、条痕土器である。１は、Ｂ地区の室町時代のＳＫ37の埋土に混入して出土した。外面には段が見られ、ナデたのちに爪状具による刺突列を幾何学的に施してある。内面は条痕調整され、胎土には繊維痕を含む。茅山下層式に類似する。上ノ垣外遺跡（度会町）で同様のものが見られる。[4] ２と３は、Ｂ地区の第３層の黄褐色土層から出土しており、１と同じく、早期後葉のものである。２は、丸棒状の口端部の内外面に条痕を施す。３は、外面のみに条痕が見られる。４は、口端部内斜面に刻み目が見られ、内面には沈線が施されている。Ａ地区の鎌倉時代のＳＫ25の埋土に混入して出土した。前期のものと思われる。

②中期末～後期前半の遺物

５と８は、Ｂ地区のＳＫ41から出ており、縄文施文ののち、ヘラ描沈線を弧状に入れてある。６は、口縁部にせまい無文帯を持ち、以下に区画縄文を施す。Ｂ地区の包含層から出土した。７は、半裁竹管によるらしい並行沈線を持つ。Ａ地区の鎌倉時代のＳＫ14に混入していた。

③弥生時代の遺物

９は、Ａ地区の柱穴から出土した弥生中期の甕の口縁部で、口端部下端に刻み目を持つ。外面は縦方向、内面は横方向に、粗いハケメが施されている。

（２）平安時代～室町時代の遺物

ＳＢ１出土遺物　少量の細片が出土したのみで図示できるのは３点である。10は、蚊山遺跡におけるⅢ期によくみられるＣ型式の土師器の小皿で、ヨコナデは認められず、外面にはオサエ痕が目立つものである。[5] 時期は13世紀後半から14世紀前半と思われる。11の土師器の小皿は、口縁部の内外面にヨコナデを施し、橙色を呈するところから、12世紀の後半から13世紀前半のものと思われる。12の山皿は、藤澤良祐氏の山茶椀編年における第５型式の尾張型で口端部に濃く自然釉が残る。[6]

ＳＢ２出土遺物　13は、土師器鍋の口縁部で、伊藤裕偉氏の編年による南伊勢系土師器鍋の第１段階ａ型式にあたるもので、時期は12世紀後半から13世紀前半と考えられる。[7] 14の灰釉陶器の椀は、口縁部のみで釉の浸け方がよくわからないが、断面から斎藤孝正氏の編年における、百代寺窯式のものと思われる。[8]

ＳＢ３出土遺物　15の山茶椀は、12の山皿と時期・産地とも同様と考える。

ＳＤ１出土遺物　16～18の土師器の小皿はいずれも径は12cm前後で器壁は薄く、色調は白っぽい。伊藤氏の南伊勢系土師器皿Ｂ系統の編年におけるｂ期と考えられ、14世紀前半のものと考えられる。[9] 19の山皿は、藤澤編年の第５型式の渥美型と考えられ、口縁端部に一部暗オリーブ色の自然釉を残す。全体の歪みが大きい。20は青磁の小皿で、中国の南宋時代と思われる龍泉窯系のものである。

ＳＫ９・40出土遺物　21は、土師器の小皿で、口縁端部にヨコナデが、外面にはオサエが施されている。器壁は薄いが色調は浅黄橙色を残し、13世紀前半のものと思われる。22の山茶椀は、藤澤編年の第６型式の尾張型と考えられ、21の土師器の小皿とほぼ同時期と思われる。23の土師器の小皿は、色調は21と比べて白っぽいが、やはり13世紀前半のものであろう。24の土師器鍋は、口縁端部にヨコナデが施され、折返部分は逆三角形の断面形になる。伊藤編年の第２段階ｂ型式にあたり、時期は13世紀の半ばと言えるだろう。25の景徳元宝(北宋、1004年初鋳）は、Ｓ

K40の底から1枚だけ見つかったものである。26の刀子の先も銅銭とほぼ同じところから出土した。

A地区土坑群出土遺物　SK24の27とSK14の28・29の土師器鍋は、口縁部の折り返しからみて伊藤編年の第1段階にあたり、時期は13世紀前半と思われる。SK35の30はSK40の23と、SK27の31は同じくSK40の22と、それぞれ同じ時期の土師器小皿、山茶椀と見て良いであろう。SK28の32の瓦器の椀は、口縁端部が内弯し、内側に沈線が1本見られる。内外面全体にヘラミガキが施され、山田猛氏の編年のⅡ段階2型式にあたると考えられる。[10] 時期は12世紀の前半と思われる。

その他の出土遺物　33は、土師器の小皿で、口縁端部にヨコナデを施し、外面にはオサエが見られる。色調は白っぽく、14世紀前半のものと考えられる。34は、山茶椀の底部片で、藤澤編年による第5型式の渥美型に相当するものと思われる。35は、土師質の紡錘形の土錘で、螺旋状に巾5㎜ほどの凹線が見られる。36は、瓦質で紡錘形の土錘だが、時期は不明である。以上の4点は、A地区の包含層からの出土であり、他の遺物との関係から遅くとも14世紀代のものと考える。37と38は、いずれもB地区の遺構から出土した土師器の鍋で、口縁端部が内弯する伊藤編年の第3段階と考えられ、15世紀前半のものと思われる。

V. 結　　語

飯南町における埋蔵文化財の本格的な発掘調査は、同町粥見で平成7年8月から11月にかけて三重県埋蔵文化財センターが行った溝端遺跡に次いで、この奈可切遺跡で2件目である。今回の調査は、県道拡幅に伴うものであるため、小面積であったが、縄文時代の土坑、鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物など、重要な発見もあった。

縄文時代の陥穴状の土坑は、三重県内では、嬉野町天花寺の馬ノ瀬遺跡、[11] 青山町の勝地大坪遺跡、[12] 安濃町の西相野遺跡[13]などで見つかっている。馬ノ瀬遺跡の陥穴状遺構は、縄文早期前半までのもので、この内の3基は、奈可切遺跡のSK42・43と同じく土坑底部中央に棒状の物を差し込んだと思われる小穴が見られる。同様のものは、勝地大坪遺跡では4基検出され、西相野遺跡では16基発見されている。時期はいずれも縄文早期の後半である。これらの遺跡の小穴を有する陥穴状遺構は、径・深さなど奈可切遺跡と共通する点も多い。

掘立柱建物は3棟を検出した。時期は、5間×3間以上という規模をもつSB1とSB3が13世紀の初め、SB2が14世紀と考えられる。ほぼ同じ方向で建てられており、鎌倉時代から室町時代にかけて同じ場所で建て替えられた可能性が高い。14世紀前半と思われるSD1・SD7と、15世紀前半と考えられるSD39などの溝も、流れる向きから見てこの集落と切り離して考える事はできないであろう。奈可切遺跡が位置する集落が現在、「本郷」と呼ばれていることも興味深い。

この地は、南伊勢と奈良、吉野を結ぶ道の合流点に近く、また相津峠を越えると大台町を経て熊野とも通じる、交通の要衝であった。これまで文献でしか知られていなかった伊勢神宮領の御薗・御厨との関連も思わせ、今回の発掘が残した成果と今後の課題は大きなものがある。

註

① 奥 義次 「第2編第1章原始」(『飯南町史』、1984年)。

② 「太神宮諸雑事記」(『群書類従』1)。

③ 「神鳳鈔」(『群書類従』1)。

④ 『上ノ垣外遺跡発掘調査概報』(度会町遺跡調査会、1991年)。

⑤ 前川嘉宏 「出土遺物の観察」[『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告－第6分冊－蚊山遺跡左郡地区』三重県教育委員会 ・ 三重県埋蔵文化財センター、1993年]。

⑥ 藤澤良祐 「山茶椀研究の現状と課題」(『研究紀要』3、三重県埋蔵文化財センター、1994年)。

⑦ 伊藤裕偉 「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Ｍｉｅ　ｈｉｓｔｏｒｙ』１、三重歴史文化研究会、1990年）。

⑧ 斎藤孝正 「施釉陶器年代論」（『論争・学説日本の考古学』６、雄山閣、1987年）。

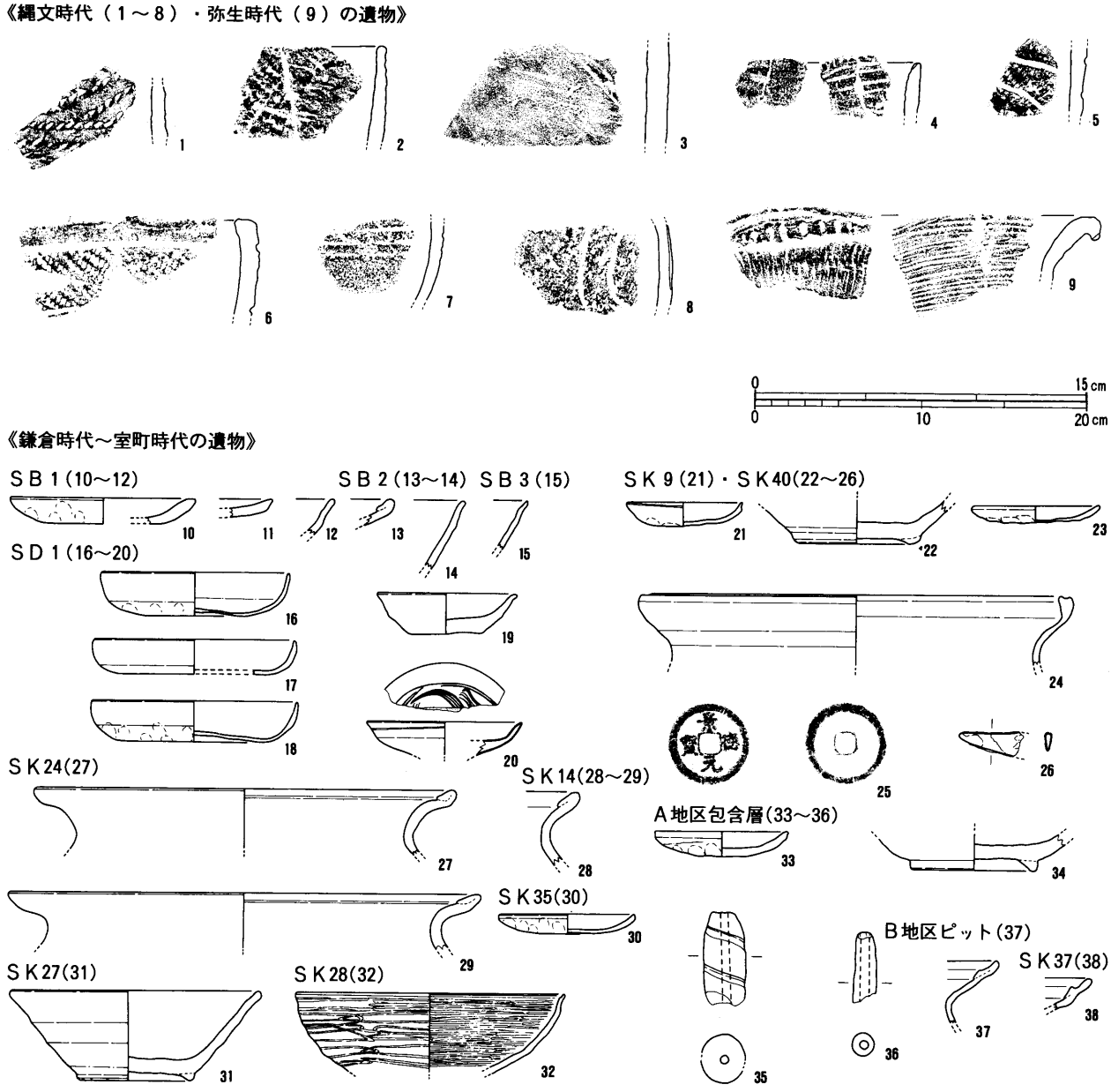
⑨ 伊藤裕偉 『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

⑩ 山田猛 「伊賀の瓦器に関する若干の考察」（『中近世土器の基礎研究』Ⅱ、1986年）。

⑪ 伊勢野久好 「馬ノ瀬遺跡の調査」（『天花寺山』、一志町・嬉野町遺跡調査会、1991年）。

⑫ 吉澤 良 「勝地大坪遺跡（Ａ・Ｂ地区）、勝地大坪古墳群」（『平成３年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1992年）。

⑬ 『いにしへの安濃町展』（安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会、1995年）。

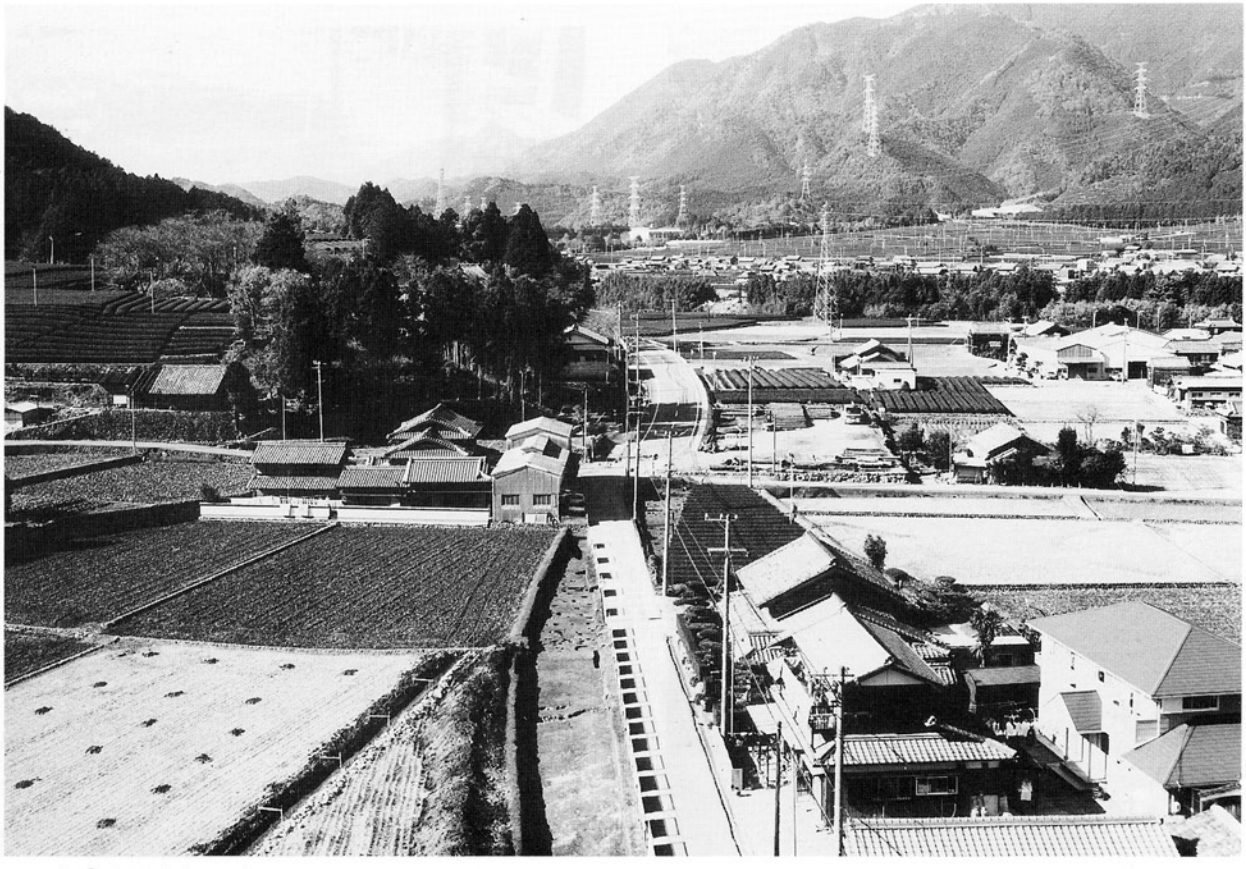


第８図　出土遺物実測図（１～９は１：３、25は１：２、他は１：４）

図版番号	登録番号	器種	出土位置		法量（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
1	002-01	縄文土器 体部片	B地区	SK37			ナデのち爪状具による刺突列	～1mmの微砂粒含む	良	明赤褐色	小片	
2	001-06	縄文土器 口縁部	B地区	黄褐色 土層			条痕文	～1mmの微砂粒含む	良	外面：赤褐色 内面：褐色	小片	
3	001-02	縄文土器 体部片	B地区	黄褐色 土層			条痕文	～2mmの細砂粒多く含む	良	橙色	小片	
4	001-07	縄文土器 口縁部	A地区	SK25			刻み目、沈線	～1mmの微砂粒含む	良	外面：鈍い橙色 内面：灰褐色	小片	
5	001-05	縄文土器 体部片	B地区	SK41			縄文、沈線	～2mmの細砂粒含む	良	鈍い黄橙色	小片	
6	001-01	縄文土器 口縁部	B地区	包			縄文、沈線	～3mmの砂粒含む	良	浅黄橙色	口縁部 14%	
7	001-04	縄文土器 体部片	A地区	SK14			沈線	～2mmの細砂粒含む	良	鈍い橙色	小片	
8	001-03	縄文土器 体部片	B地区	SK41			縄文、沈線	～2mmの細砂粒含む	良	浅黄橙色	小片	
9	002-02	弥生土器 口縁部	A地区	B7 Pit7			刻み文、ハケメ	～1mmの微砂粒含む	良	橙色	小片	外面にス ス付着
10	006-05	土師器 小皿	C地区	Pitl	11.1cm	1.5cm	外面：オサエ 内面：ナデ	細砂粒を少し含む	良	外面：浅黄橙 色	1／8	
11	004-04	土師器 小皿	A地区	B8 Pit2			外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	微砂粒を少し含む	良	橙色		
12	004-05	陶器 山皿	A地区	A7 Pit3			外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	微砂粒を少し含む	良	灰白色		自然釉付着
13	003-07	土師器 鍋	A地区	B9 Pit1			外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	細砂粒を少し含む	ふつう	浅黄橙色		
14	004-02	灰釉陶器 椀	A地区	B7 Pit3			外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	砂粒をほとんど含まない	良	表面：灰白色 断面：灰黄色		
15	004-03	陶器 山茶椀	A地区	B5 Pit8			外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	微砂粒を少し含む	良	灰白色		
16	005-04	土師器 皿	A地区	SD1	11.4cm	2.6cm	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒を少し含む	良	浅黄橙色	1／4	底部外面 に工具痕
17	005-05	土師器 皿	A地区	SD1	12.3cm	2.05cm	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	微砂粒を少し含む	良	浅黄橙色	1／8	
18	005-03	土師器 皿	A地区	SD1			外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒を少し含む	良	淡黄色		
19	006-03	陶器 山皿	C地区	SD1	8.2cm ／ 9.0cm	2.5cm	外面：ロクロナデ、糸切り痕残る 内面：ロクロナデ	微砂粒を少し含む	良	灰白色	ほぼ完 形	全体の歪 み大きい
20	006-06	磁器 青磁小皿	C地区	SD1	9.3cm		外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	微砂粒を少し含む	良	灰オリーブ色		
21	003-03	土師器 小皿	A地区	SK9	7.0cm	1.4cm	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ナデ	細砂粒を少し含む	ふつう	浅黄橙色	1／3	
22	006-02	陶器 山茶椀	A地区	SK40 南壁	台径 7.9cm		外面：ロクロナデ、糸切り痕残る、ハリツケ高台 内面：ロクロナデ	細砂粒を少し含む	良	鈍い黄橙色	底部 1／2	
23	003-04	土師器 小皿	A地区	SK40	8.0cm	1.3cm	外面：オサエ 内面：ナデ	細砂粒を少し含む	ふつう	浅黄橙色	1／3	
24	003-05	土師器 鍋	A地区	SK40	26.0cm		外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒を少し含む	良	灰黄褐色	口縁部 1／8	
25	002-03	銅銭	A地区	SK40	直径 2.4cm	厚さ 1mm				完形		景徳元宝
26	004-09	鉄製品 刀子	A地区	SK40								
27	005-02	土師器 鍋	A地区	SK24	25.2cm		外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒を少し含む	良	外面：灰白色 内面：灰褐色		
28	004-06	土師器 鍋	A地区	SK14			外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒を少し含む	ふつう	暗灰黄色		外面にス ス付着
29	005-01	土師器 鍋	A地区	SK14	28.2cm		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	細砂粒を少し含む	良	明褐灰色		外面にス ス付着
30	006-04	土師器 小皿	A地区	SK35	8.2cm	1.2cm	外面：オサエ 内面：ナデ	細砂粒を少し含む	良	浅黄橙色	1／3	
31	006-01	陶器 山茶椀	A地区	SK27	15.1cm	5.45cm	外面：ロクロナデ、糸切り痕残る、ハリツケ高台 内面：ロクロナデ	細砂粒を少し含む	やや不 良	外面：鈍い黄橙色 内面：灰色	1／4弱	高台に籾 殻痕残る
32	003-06	瓦器 椀	A地区	SK28	16.0cm		外面：横方向にヘラミガキ、オサエ 内面：横方向にヘラミガキ、口縁端部に沈線	細砂粒を少し含む	良	灰色	1／6	
33	003-02	土師器 小皿	A地区	包	8.0cm	1.4cm	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ナデ	砂粒をほとんど含まない	良	浅黄橙色	2／5	外面粘土 接合痕
34	003-01	陶器 山茶椀	A地区	包			外面：ロクロナデ、ハリツケナデ、糸切り痕残る 内面：ロクロナデ	細砂粒を少し含む	良	黄灰色	底部 1／2	底径 7.8cm
35	004-08	土師質土錘	A地区	包			外面：螺旋状に凹線	微砂粒を少し含む	良	鈍い黄褐色		重さ36.1g 1／4欠
36	004-07	瓦質土錘	A地区	包				微砂粒を少し含む	良	灰色		重さ7.9g 一部欠損
37	004-01	土師器 鍋	B地区	C4 Pit5			外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	砂粒をほとんど含まない	ふつう	外面：浅黄色 内面：黒色		外面にス ス付着
38	003-08	土師器 鍋	B地区	SK37			外面：ハリツケナデ、ナデ 内面：ハリツケナデ、ナデ	微砂粒を少し含む	ふつう	灰黄褐色		内外面に ススス付着

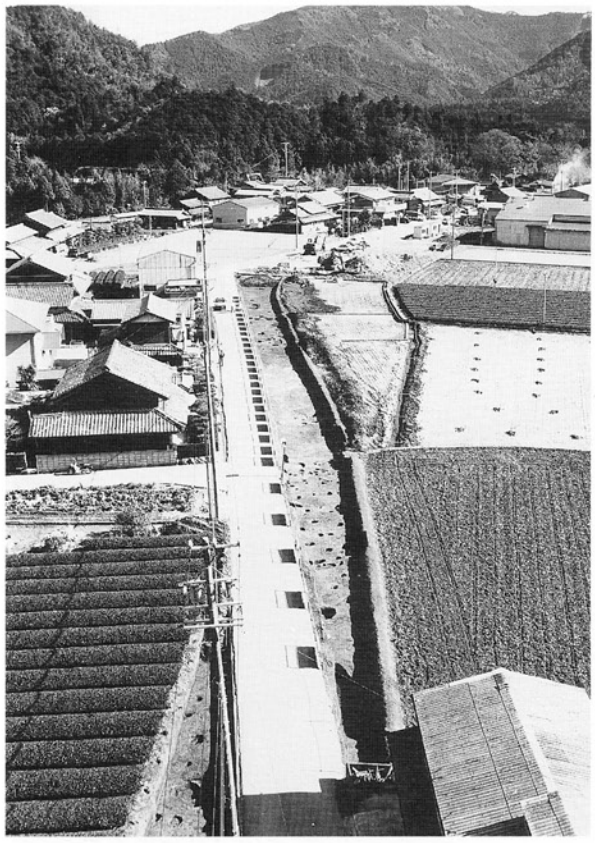
第１表　出土遺物観察表

調査前風景（東から）

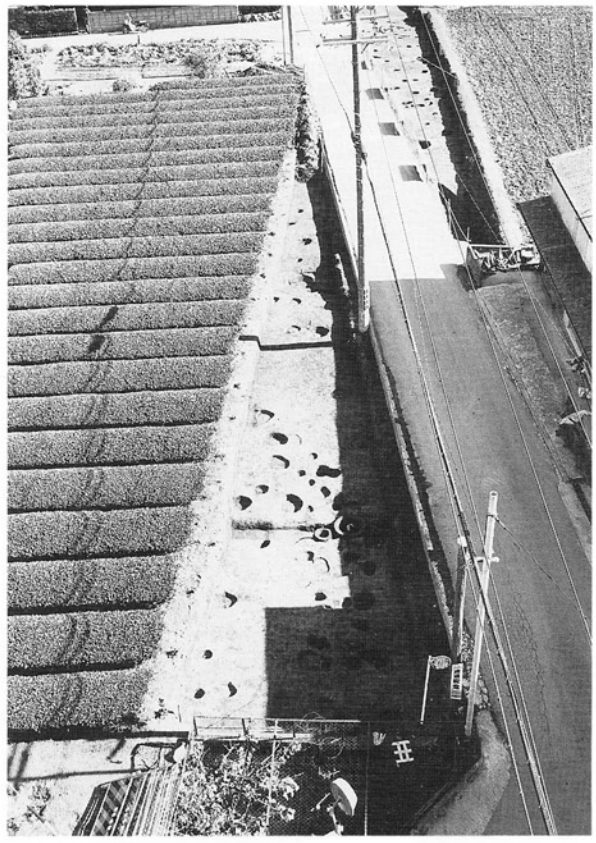


調査区遠景（東から）

図版 2



A地区全景（西から）



B地区全景（西から）

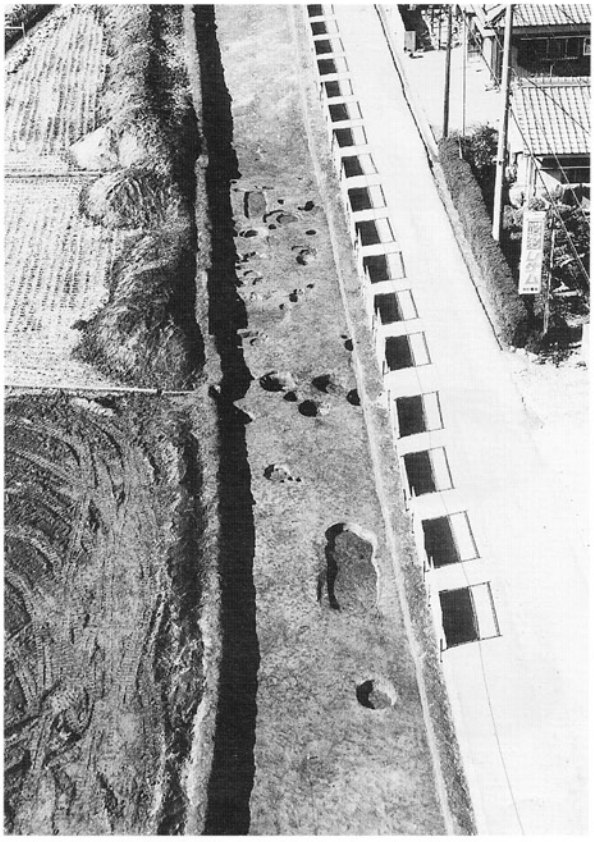
C地区全景（西から）

B地区下層全景（東から）

ＳＢ１～３（東から）

ＳＫ９・40（北東から）

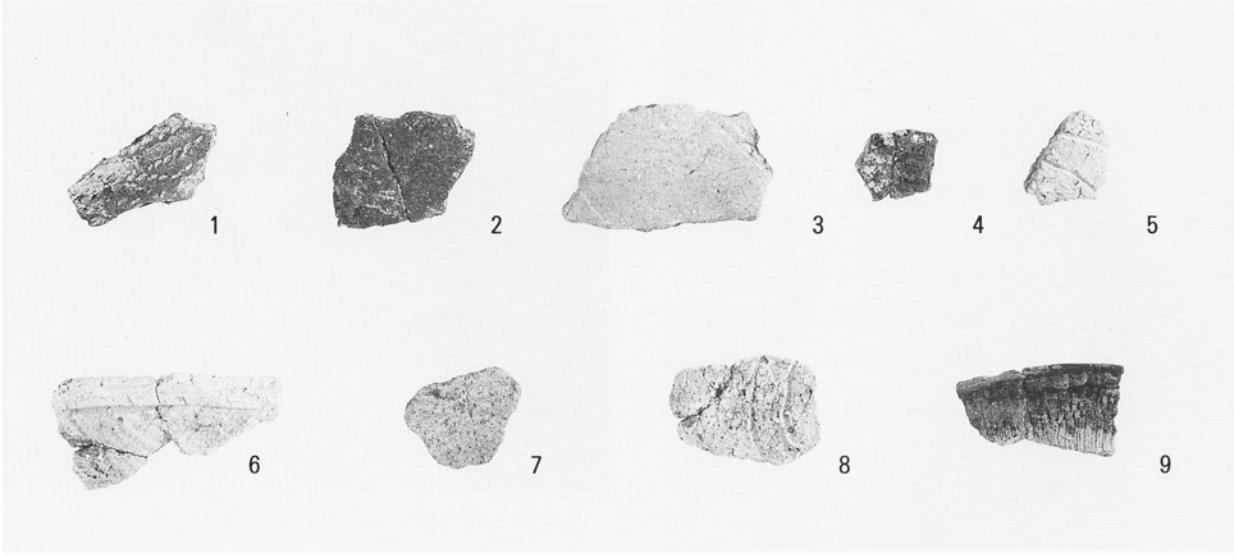
ＳＫ42（北東から）

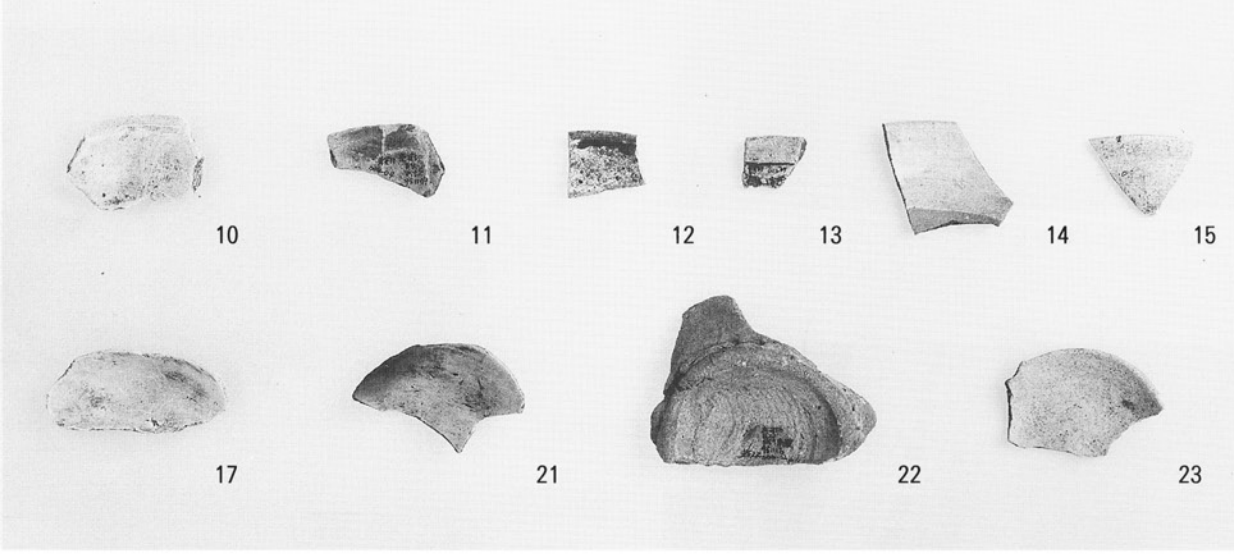


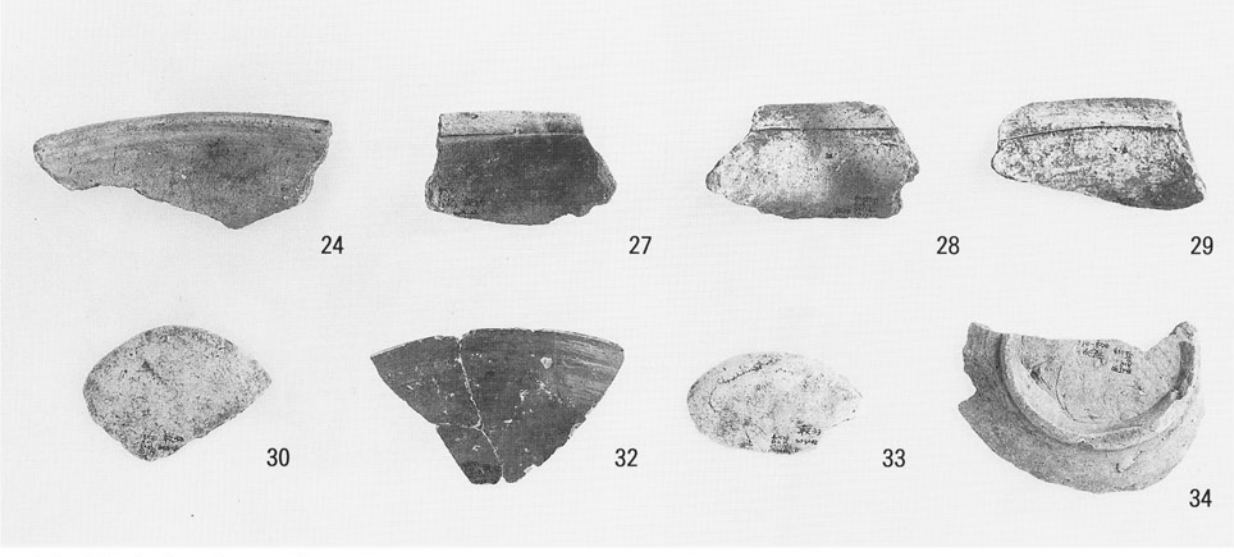
Ａ地区土坑群（東から）

ＳＫ43（西から）

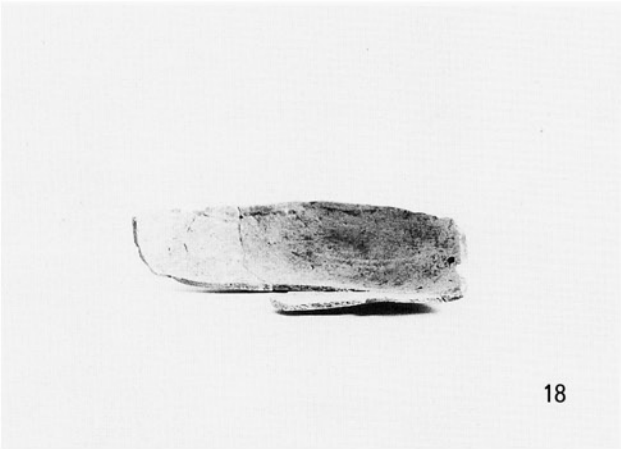
図版 4

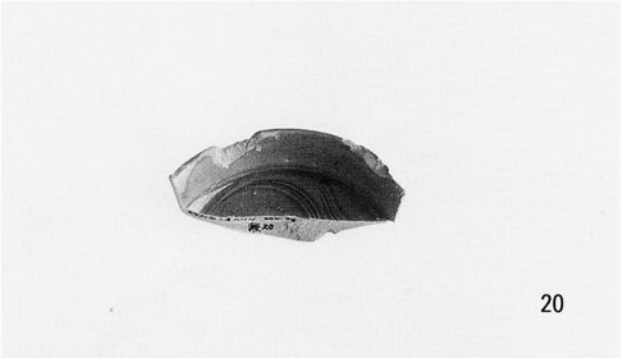


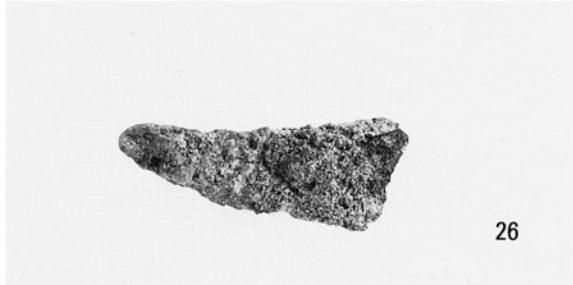


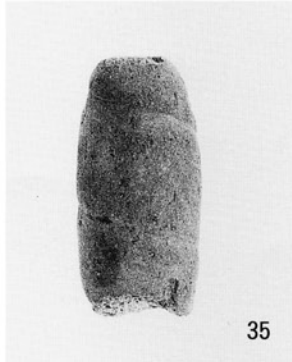


出土遺物（1）　（1：3）









出土遺物（２）　（25・26は１：１、他は縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	なかぎりいせきはっくつちょうさほうこく
書名	奈可切遺跡 発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告
シリーズ番号	141
編著者名	西出 孝
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965－2－1732
発行年月日	西暦 1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
奈可切遺跡 (なかぎりいせき)	三重県飯南郡飯南町本郷字奈可切 (みえけんいいなんぐんいいなんちょうほんごうあざなかぎり)	24421	―	34° 26′ 32″	136° 23′ 31″	19951101～ 19951205 追加調査 19960226～ 19960228	890	一般地方道片野飯高線道路整備工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項
奈可切遺跡	集落跡	平安時代末期～室町時代中期	掘立柱建物3棟、溝5条、土坑群、配石遺構、縄文時代土坑4基	山茶椀、山皿、土師器皿、土師器鍋、瓦器、青磁、宋銭、刀子、縄文土器	

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　141

奈可切遺跡発掘調査報告

1996年3月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社